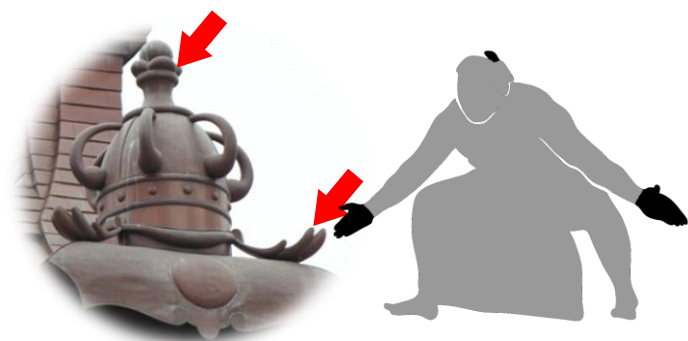


辰野金吾は相撲好きでも知られ、設計した日本銀行本店はその重厚さから、相撲の仕切りをしているような建物だと評されており、旧両国国技館（1909年竣工／現存せず）も辰野金吾の設計です。

東京駅は、横綱の土俵入りをイメージして設計したと言われており、オブジェも大銀杏（おおいちょう）を結った頭部と大きく広げた両手をモチーフとしています。



作品集成絵図（複製）

『辰野隆随想全集 5 忘れ得ぬことども』

「家庭の力士」より

昨秋亡くなった弟の保は一高^二時代には相当相撲が強かった。彼は時々出羽海部屋を訪れて相撲を取っていた。今の藤島親方一昔前の横綱常の花^三が未だ序二段力士で可一と呼ばれていた頃、弟は屢々可一と取組んで押し出したり、投げたりしていた。後年、弟は「俺も若い時分には横綱を倒したこともあったが」などと、太閤様に草履を取らせたような気遣いを吐いていた。

弟が一高生で、僕が大学生であった頃、兄弟二人がいつも座敷で相撲をとって、障子の棧を折ったり襖に穴をあけたりするので、或日お爺（辰野金吾）は一策を案じて、今後は座敷で相撲をとることは断じて相成らん。その代り、庭の隅に相撲をとっても気がひけないようなバラックを建ててやると宣言した。やがてお爺は約束通り、兄弟の書斎にも寝室にも道場にもなるような、八畳と十畳のバラックを建ててくれた。

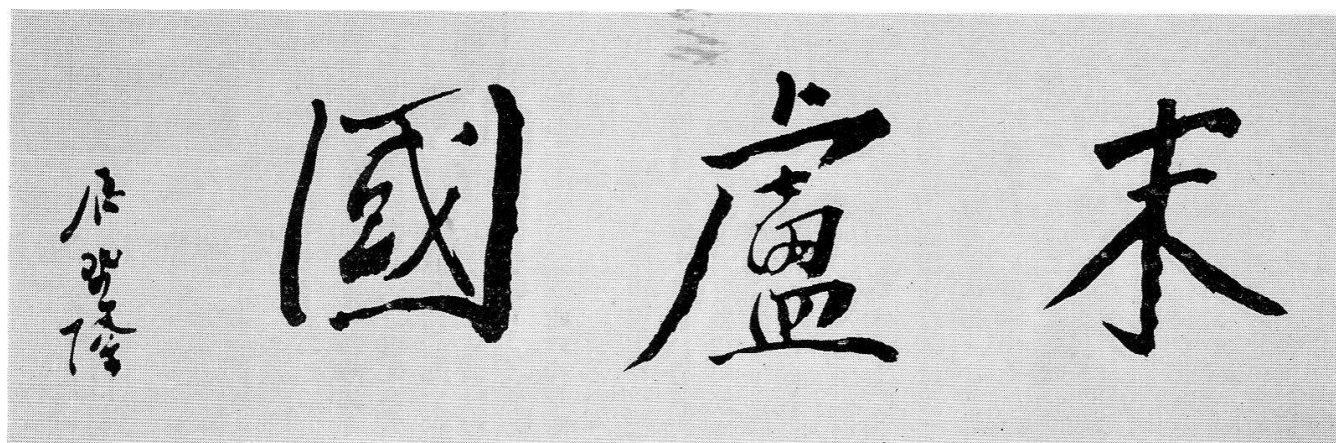
新築落成の日に、僕ら兄弟は、お祝に一番行こうかと、どちらからともなく云い出した。親戚の栗本謙吾という快男子を行司にして、十畳の間を土俵と定め、僕と弟とは「さあ来い」と掛声をかけて、十番勝負に取りかかった。互角の勝負を幾度か繰り返してから、愈々最後の立合となったが、少しく勝を急いで寄り身に行った僕の体が延びたところを弟の掛けた腰投げが見事に極まって、僕はもんどり打って投げ飛ばされた途端に、めりめりと音がしたと思うと、僕は襖を突き破って夜具戸棚の中に尻もちを付いていた。座敷の中では、行司が「勝負あった」と呶鳴りながら、快勝した弟と一緒に腹を抱えて笑いこけていた。

夕刻、お爺が帰って来て、新築バラックを見分
すると、安ものではあるが新しい襖に人一人通れ
る大穴があいているので、破壊作用があまりにも
早すぎたと思ったらしく「とんでもない奴等だ」
と傍のおふくろを顧みて苦笑をもらすと、おふく
ろも仕方なくお爺の苦笑に和していた。どうも僕
等兄弟はその時分から「あきれたぼういず」の先
駆だったらしい。

今では、お爺もおふくろも逝いて久しく、好敵
手の弟も昨年死んでしまったので、僕は信玄を失
った謙信のように慄然としている。然し、先日来、
長男から晴れの勝負を申し込まれているので、そ

のうち、からだのコンディションの良好な日を選
んで、庭の芝生の上で彼をしたたか投げ飛ばして
やろうと、今からたのしみにしている。

辰野金吾の設計した建物は、しばしば相撲の仕
切りをしているような建物だと評され、「辰野金吾
ではなく堅固だ」と称されたと言われています。
東京駅は、横綱の土俵入りをイメージして設計し
たと言われており、東京駅中央ヴォールト頂部飾
り（旧唐津銀行試作品所蔵）も大銀杏（おおいち
ょう）を結った頭部と大きく広げた両手をモチー
フにしたと言われています。辰野隆は1950年
より終生、横綱審議委員を務めています。



唐津・松浦郷土史誌「末盧國」（松浦史談会発刊）題簽 第8号(昭和39年3月20日発刊) 辰野隆書

参考資料

『辰野隆随想全集5 忘れ得ぬことども』

『東京駅の建築家辰野金吾伝』東秀紀

- ⁱ 辰野隆（たつのゆたか）：辰野金吾の長男。フランス文学者で谷崎潤一郎とは府立一中以来の友人。弟に辰野保（たもつ）。
- ⁱⁱ 一高：旧制第一高等学校。現在の東京大学教養学部。
- ⁱⁱⁱ 横綱常の花：第31代横綱常ノ花寛市（出羽ノ海部屋）